同窓つなぐ高校ノート

30年で国内外3106校分

アナログ貫き再会取り持つ

ビジネス街や官庁街に隣接し、夜になれば飲み歩くサラリーマンでごったがえす街の一角に「新橋　有薫酒蔵」はある。

やや薄暗い店内は混み合い、人いきれが伝わってきた。校歌を合唱する酔客たちもいる。

100席ほどのスペースを縫うように棚があり、ぎっしりとファイルが収まる。背表紙には高校の名前が記されている。「高校よせがきノート」だ。

「ここまで増えるとは思いませんでした」。おかみの松永洋子さんは言う。10日現在、国内外の3106校分がある。国内の全高校4925校のおよそ3分の2に当たる数だ。

常連客に「母校のノートを置いてほしい」と頼まれたのが1987年。第1号は福岡県の高校だった。「ワープロが普及し、鉛筆で書くことが減ってきたころ。手書きの良さを忘れずにアナログでいこうと思いました」と松永さんは振り返る。競い合うように客がノートをつくり、増え続けた。県内は新潟高や長岡高など64校ある。

ノートを管理するおかみの松永洋子さん

すべて松永さんが管理する。新たにノートをつくるときは、インターネットで校舎の写真や校歌の画像を探して、ノートをとじるファイルに貼り付ける。要望が多すぎて、新規は1日1校に絞った。

「負担が大きくて、何度もやめようと思った。そのたびにお客さんに『ありがとう。おかげで元気が出たよ』と言われ、ここまできた」としみじみと語る。

自分の出身校しか閲覧できず、書き込む場合は自分の名刺を貼るのが決まりだ。あとは高校時代の思い出や、よく行った店のことなど好きなことを書いていい。

統廃合した高校も、当時の校名でノートを置いている。「なくなった学校をノートとして残したい」というお客がいるからだ。

名刺を頼りに音信不通だった同級生と再会するドラマも生み出してきた。地方出身者が行き交う新橋の片隅で、今日もまた新たなノートが生まれる。

「新橋　有薫酒蔵」の営業時間は平日が午後5時～同11時半で、土曜日は同4時半～同11時。定休日は日曜祝日。JR新橋駅日比谷口から徒歩2分。住所は港区新橋1の16の4　りそな新橋ビル地下1階。問い合わせ、予約は、03（3508）9296。

書き込み縁　経営危機に活路

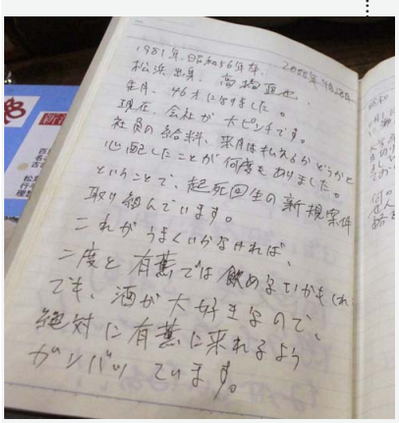
新潟高OB　高橋直也さん（54）

有薫酒蔵のノートをきっかけに、経営する会社の危機を乗り切った県人がいる。新潟高OBの高橋直也さん（54）＝東京都＝だ。県内の高校第1号のノートをつくった人でもある。「県人が東京で頑張っている様子を知ることができるのがうれしい」と語る。

常連客の高橋さんがおかみさんの勧めでノートを作ったのは2006年だった。県内の高校では初めてで、全体でも183校目だった。

当初は高橋さんの書き込みに続く人が現れず、「同窓の方々のコメントが楽しみだが、なかなか増えないのが残念だ」とつづった。

高橋直也さんが書き込んだノート。危機にひんした会社経営の悩みを家族や友人に言えず、独り言のように書き込んだという



1981年　昭和56年　2006年　平成18年
松浜出身　高橋直也
生年　46才になりました。
現在、会社が大ピンチです。
社員の給料、来月はもらえるかどうかと
心配したことが何度もありました。
ということで、起死回生の新規案件
取り組んでいます。
これがうまくいかなければ、
二度と有薫では飲めなくなるかもしれない
でも、酒が大好きなので、
絶対に有薫に来れるよう
がんばっています。

08年春になると高橋さんの書き込みが一変した。サブプライムローン問題の余波で、社長を務める投資顧問会社の業績が悪化。社員の給料の支払いも困難な状況に陥ったとき、こう書いた。「会社が大ピンチ。新規案件がうまくいかなければ有薫では飲めなくなる」

会社の身売りを考えていたときだった。次にノートを開き驚いた。隣のページに「新橋のヘッドハンティング会社に勤めています。何かお役に立てること、あるかも知れません。下記へご連絡を！」とあった。

書いた主は「一回り上」の先輩、亀井純一さん（故人）。連絡を取ると、亀井さんは親身になり、いくつも会社を紹介してくれた。

最後は高橋さんが探した会社から出資を受けることができたが、「決まる直前まで毎日のようにアドバイスをいただいた」と話す。

こうした様子がテレビ番組で取り上げられ、店のノートの数が一気に増えた。

現在は神奈川県で抗がん剤などの創薬ベンチャー企業を経営する。職場が都心から離れ、店に来る機会は減ったが、立ち寄った際にはページをめくる。

「亀井先輩と出会えたのはノートのおかげ。縁は本当に大事なものだ」